

## 〈実践研究〉

# ルーブリックを用いた養護実習評価について

——「教職実践演習」とキャリア支援につなげるために——

久保 加代子\*, 大西 宏昭\*\*, 加藤 直子\*  
竹原 章雄\*\*, 森島 研次\*\*, 高森 香\*

Rubric Assessment for Evaluation of Yogo teaching practice  
——“Practical seminar for the teaching profession” and Career support——

Kayoko Kubo, Hiroaki Onishi, Naoko Kato,  
Akio Takehara, Kenji Morishima and Kaori Takamori

## I はじめに

本学養護保健学科では、子どもや保護者の最善の利益を見据えて職務を果たせる養護教諭養成を目指し、教育課程を編成している<sup>1)</sup>。なかでも、養護実習、看護臨床実習及び教職実践演習は、豊かな人間性と規範意識を身につけ、社会に貢献する能力を養成するために重要な科目であることから、丁寧に細やかな個別指導を実践している。

養護実習については、実習評価を適正に実施するとともに、その評価を学生に還元することにより、学生の自己評価力、自己教育力を高めることが可能と考え、令和2年度から養護実習評価在り方を明らかにするための研究を開始した。実習校教員と本学科教員が主たる実習評価者となることから、研究方針を以下の通り設定した。

(1) 実習校教員による評定値（以下、「実習校評定値」と略す）と本学科教員による評定値（以下、「教員評定値」と略す）の実態を把握する。

(2) 実習校評定値と教員評定値には乖離が想定されることから、ルーブリックの活用により実習校教員と本学科教員との評定値の不一致を軽減することができないかを検証する。

養護実習は実習指導養護教諭にとっても自らの実践を客観的に振り返る機会になること、自己の教育観・養護観・子ども観を確認する機会となること、実習指導の経験が新たな学びの意欲となることが指導者側の学びの要素として報告されているが<sup>2)</sup>、一方で実習の評価につ

ては「難しい」「わからない」といった困難感や不安があることも報告されており<sup>2)</sup>、「指導と評価の一体化」を図ることにより、実習指導養護教諭の実践力向上も期待できると考える。

(3) ルーブリックを学生と共有することにより、学生の自己評価力、自己教育力を高めることができないかを検証する。

養護実習に参加した学生の中には養護実習をきっかけに一般企業に就職希望を切り替える学生が毎年見られる。ルーブリックをこれらの学生と共有することにより、効果的な「卒業後のキャリア選択」指導を行うことができると考えられる。

我々は既に、上記方針(1)について教員評定値と実習校評定値には乖離があることを明らかにし、解消策としてルーブリックを用いた評価基準の設定と共にその活用方法を今後の課題として示した<sup>3)</sup>。今回は、方針(2)(3)について研究することとする。

## II 目的

本研究における目的は、以下の2点である。

1. 実習校評定値と教員評定値の乖離が明らかことから、ルーブリックの活用により実習校教員と本学科教員との評定値の不一致を軽減することができないかを検証すること。
2. ルーブリックを学生と共有することにより、学生の自己評価力、自己教育力を高めることができないかを検証すること。

受付日 2022. 5. 17 / 掲載決定日 2022. 9. 29

\*関西女子短期大学 准教授

\*\*関西女子短期大学 教授

### Ⅲ 研究方法

#### 1. 対象

##### (1) ルーブリック活用群

令和 3 年度養護実習 (15 日間) に参加した本学科 2 年生 28 名

##### (2) ルーブリック未活用群

令和 2 年度養護実習 (15 日間) に参加した本学科 2 年生 34 名

#### 2. 調査期間

令和 3 年 5 月 6 日～令和 3 年 10 月 27 日

#### 3. 検証方法

##### (1) ルーブリック活用効果について

検証対象項目ごとに、ルーブリック活用群 (令和 3 年度養護実習) とルーブリック未活用群 (令和 2 年度養護実習) の実習校評定値と教員評定値の一致度を比較検証することにより、ルーブリックの有用性と改善点を検討した。

##### ①ルーブリック

ルーブリック活用群に用いたルーブリックは表 1 の通りである。なお、本研究では、表 1 (1)～(8) を評価の観点、①～⑭を評価の着眼点、5 習得～1 習得困難を評価尺度とし、検証対象項目は (1)～(8) の 8 項目とした。

表 1 関西女子短期大学養護保健学科養護実習ルーブリック (令和 3 年版)  
(参考) 2021 年度 関西女子短期大学養護保健学科 養護実習評価基準表

	5 習得	4 ほぼ習得	3 習得可能	2 努力が必要	1 習得困難
(1) 服装、みだしなみ、清潔	新任教員として必要なことは身に付いている。	指導に従い、以後は改善できる。	指導内容を次に活かすことはできないが、指導に従い改善できる。	一般的な指導では改善できないが、個別の具体的な指導で改善できる。	教員としてのマナー、規範意識に欠ける。
(2) 実習内容に関する予習復習	毎日、指示された内容及び自ら見つけた課題について、予習復習ができる。	指示された内容及び自ら見つけた課題について、予習復習ができる。	指示された内容について、予習復習ができる。	不十分であるが、指示された内容の予習復習ができる。	指示された予習復習を行わない。
(3) 意図的に子どもと関わる力 ①人権尊重の態度 ②言葉遣い ③人前で話す、説明する	自ら、場面・児童の個性に応じたかかわりができる。	指導を受けると、場面・児童の個性に応じた関わりができる。別の場面で応用できる。	指導を受けると、場面・児童の個性に応じた関わりができる。	意図的な関わりとは言えないが、指導を受けると関わりようとする事ができる。	助言を受けても関わりようとしていない。
(4) 健康教育を行う力 ④授業 (指導) 案作成、実践 ⑤教材や資料の工夫	新任教員として任せられる。自ら改善を試みることができる。	助言内容について理解し、改善に向けて新たな案を自ら提示し、改善できる。	助言内容を理解し、具体的な指示を受けると改善できる。	助言内容を理解でき、具体的な指示を受けると不十分であるが改善できる。	指導案・教材の作成及び改善はできない。
(5) 救急処置を行う力 ⑥軽度の擦り傷等、簡単な処置 ⑦重症度、優先順位を見極め	新任教員として任せられる。自ら質問したり調べたりなど研鑽ができる。	問診・アセスメント・処置のいずれかに不十分な点がある。しかし、自ら質問したり調べたりなど研鑽ができる。	問診・アセスメント・処置のいずれにも不十分な点がある。しかし、自ら質問したり調べたりなど研鑽ができる。	知識・技術は不十分であるが、指導内容は理解でき、指示を受けて改善のための自己研鑽ができる。	知識・技術が不足している。改善のための自己研鑽の態度はみられない。
(6) 日々の勤務を記録する力 ⑧要点の要約 (内容) ⑨文章構成、漢字使用、誤字 ⑩期限内に提出	新任教員として必要な記録ができる。	要点が記録できる。国語的 (文章構成・漢字使用・誤字等) に不十分な点は指導すると訂正でき、次回からは改善できる。	要点の記録及び国語的 (文章構成・漢字使用・誤字等) に不十分な点は指導すると訂正できるが、以後も指導が必要な箇所がある。	指導箇所について、不十分であるが訂正できる。	指導を受けても訂正していないなど、改善しようとする態度はみられない。
(7) 教員としての責任感の自覚 ⑪教育者としての自覚 ⑫命を預かる覚悟	教員に求められている職業倫理について十分に理解できており、自分の職責を果たそうとする姿勢がある。自ら知識・技術を習得しようとする。	教員に求められている職業倫理についておおむね理解できており、その範囲内で自分の職責を果たそうとする姿勢がある。自ら知識・技術を習得しようとする。	教員に求められている職業倫理について具体的な指導を受けると理解でき、その範囲内で自分の職責を果たそうとする姿勢がある。指導を受けると知識・技術を習得しようとする。	教員に求められている職業倫理について具体的な指導を受けると理解でき、不十分であるが自分の職責を果たそうとする姿勢がある。指示を受けると知識・技術を習得しようとする。	教員に求められている職業倫理について具体的な指導を受けても理解ができず、自分の職責を果たそうとする姿勢はみられない。知識・技術を習得しようとする態度はみられない。
(8) 自分を省察する力 ⑬自己の課題が把握できる ⑭実践を振り返る	自ら自己課題を見つけ、解決しようとする。自ら他者の良い点に気づき、模倣するなど、他者から学ぶことができる。	自ら自己課題を見つけ、解決しようとする。指導を受けて、他者の良い点に気づき、模倣するなど、他者から学ぶことができる。	指導を受けると自己課題に気づき、解決しようとする。指導を受けて、他者の良い点に気づき、模倣するなど、他者から学ぶことができる。	指摘された自己課題について、具体的な指導に従い解決しようとする。指導を受けると、不十分であるが他者から学ぶことができる。	具体的な指示を受けても、解決しようとしていない。他者から学ぶことはできない。

②実習校評定値及び教員評定値の数量化

実習校評定値及び教員評定値は、対象学生 28 名について表 1 (1)～(8) の検証対象項目ごとに 5 段階尺度 (5 点：習得、4 点：ほぼ習得、3 点：習得可能、2 点：努力が必要、1 点：習得困難) で評価した。

教員評定値は、本学科教員 6 名が実習校養護教諭と対面あるいは電話で、検証対象項目について聞き取り、評価したものである。本学科教員間での測定バイアスを防止するため、訪問前にモデレーションを行った<sup>4)</sup>。さらに、信頼性を高めるため、巡回指導後に本学科教員で協議を行い、教員間の評価の差を修正した。

③ルーブリック活用効果について

下記算出方法により実習校評定値と教員評定値の「一致率」を算出し、ルーブリック活用群とルーブリック未活用群の「一致率」を比較することにより、ルーブリック活用効果を判定した。

※「一致率」の算出方法

- ・検証対象項目ごとに、対象学生の実習校評定値と教員評定値を比較し、「同一点」を「一致」、「1 点以上の差がある場合」を「不一致」とした。
- ・下記により「一致率」を算出した。  
一致率＝「一致」の学生数／全学生数×100 (%)

(2) ルーブリック活用群の学生への指導効果

ルーブリック活用群の学生は、実習校評価及び教員評価と同内容を同尺度で 2 回自己評価を行った。1 回目の自己評価は、養護実習終了直後に評価の観点と評価尺度のみを示し、ルーブリックを活用せずに行った (以下、ルーブリック未活用評価と表記)。その後、授業内でルーブリックについての説明を行い、ルーブリックを活用して自己評価を行った (以下、ルーブリック活用評価と表記)。そして、このルーブリック未活用評価、ルーブリック活用評価の比較に加え、実習校評価及び教員評価の 4 つの評価を活用し、個別面談を実施した。

4. 倫理的な配慮

評価記録の本研究への利用については対象者に説明し、同意を得た。個人及び実習校が特定されることのないよう配慮した。

IV 結果

1. ルーブリック活用群の実習校評定値と教員評定値の一致度の比較

図 1「ルーブリック活用群・未活用群の実習校評定値と教員評定値の関係」に示したように、ルーブリック活

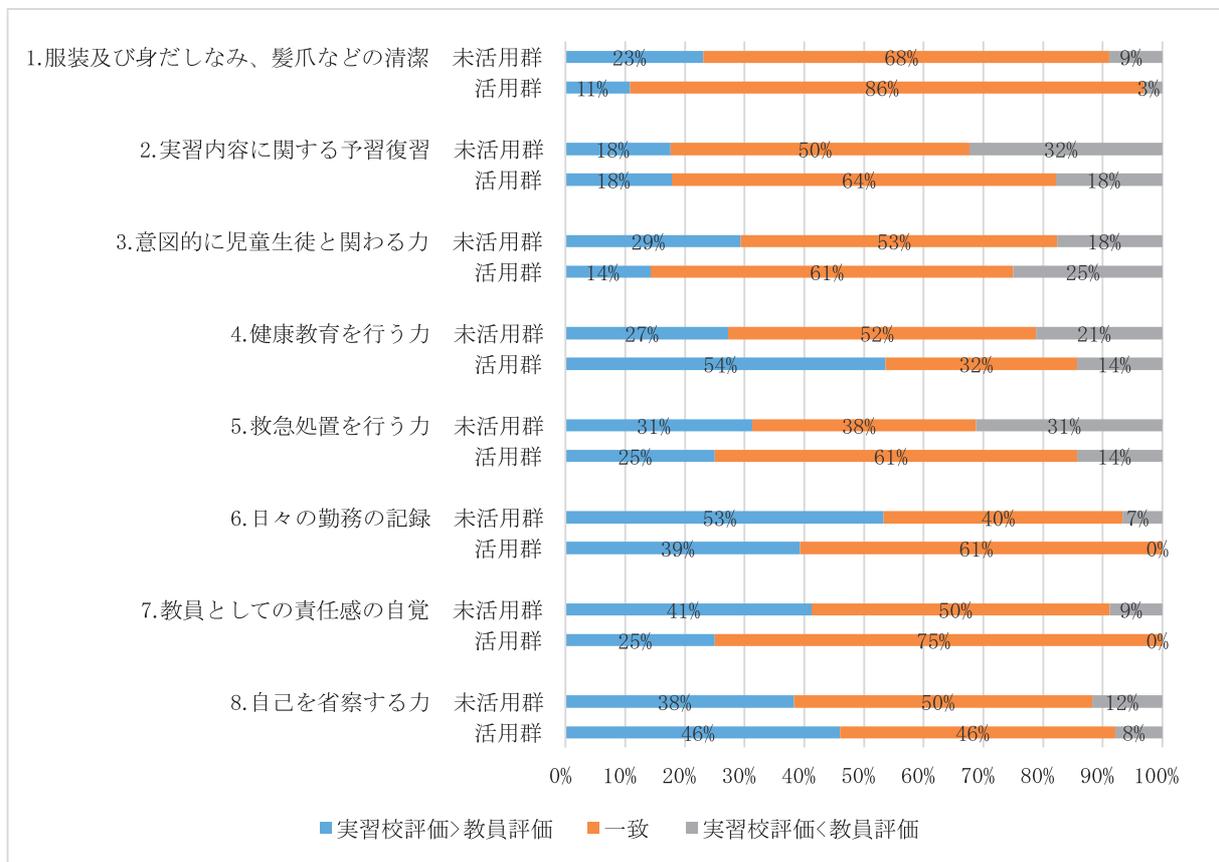


図 1 ルーブリック活用群・未活用群の実習校評定値と教員評定値の関係

用群で最も一致率が高かったのは「1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔」86%であった。一方、一致率が最も低かったのは「4. 健康教育を行う力」32%であった。

その他の項目を一致率の高い順に並べると「7. 教員としての責任感の自覚」75%、「2. 実習内容に関する予習復習」64%、「3. 意図的に児童生徒と関わる力」61%、「5. 救急処置を行う力」61%、「6. 日々の勤務の記録」61%、「8. 自己を省察する力」46%であった。

2. 実習校評定値と教員評定値の差が 2 点以上のケース

学生 1 人につき 8 項目の評定がなされているため、28 名×8 項目の合計 224 評定値（以下ケースと表記）を対象とした。全 224 ケースのうち、評定値の差が 2 点以上あった 16 ケース（表 2）について、特徴を整理し、質的分析を行った。

(1) 検証対象項目について

項目ごとのケース数は、項目 2、3、5、7、8 が 1~3 ケース、項目 4 は 7 ケース、項目 1 と 6 は 0 ケースであった。

(2) 対象学生について

16 ケースに該当する学生は a~j の 10 名であった。

a、b、c、d、e、f、g の 7 名が 1 項目該当し、h は 2 項目、i は 3 項目、j は 4 項目該当した。

3. ルーブリック活用効果について

ルーブリックの活用効果について、ルーブリック活用群と未活用群との比較により検討した。実習校評定値と教員評定値の一致率の変化を表 3 に示した。

(1) ルーブリック活用効果がみられた項目

8 項目中 6 項目で実習校評定値と教員評定値の一致率

表 3 実習校評定値と教員評定値の一致の変化

	一致 (%)		上昇率 (%)
	導入前	導入後	
1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔	68	86	26%
2. 実習内容に関する予習復習	50	64	28%
3. 意図的に児童生徒と関わる力	53	61	15%
4. 健康教育を行う力	52	32	-38%
5. 救急処置を行う力	38	61	61%
6. 日々の勤務の記録	40	61	53%
7. 教員としての責任感の自覚	50	75	50%
8. 自己を省察する力	50	46	-8%

が高くなった。上昇率が高い順に「5. 救急処置を行う力」61%、「6. 日々の勤務の記録」53%、「7. 教員としての責任感の自覚」50%、「2. 実習内容に関する予習復習」28%、「1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔」26%、「3. 意図的に児童生徒と関わる力」15%であった。

(2) ルーブリック活用効果がみられなかった項目

8 項目中 2 項目で一致率が低下した。低下率は「4. 健康教育を行う力」38%、「8. 自己を省察する力」8%であった。

4. ルーブリックに関する実習校評価者の意見

ルーブリックの活用について、評価者である養護教諭にインタビューをし、「必要」「あった方が良い」「どちらでもよい」「ない方が良い」「不要」の五件法で回答を得た。電話での巡回指導となり、詳細の聞き取りが困難であった 2 例を除く 26 例について、表 4 に示した。また、意見としていただいた内容は、「有効点」「要望」「課題」に分類して整理した。

5. ルーブリック活用群の学生への指導効果

学生による 2 つの自己評価（ルーブリック未活用評価及びルーブリック活用評価）の両評価の提出が可能であった 27 名について、ルーブリック未活用評価を基準とし、ルーブリック活用評価との評定値の差を点数化し、変化の様子を図 2 に示した。ルーブリックの活用により、どの項目も自己評価が変化した学生が見られた。

項目「7」は、27 名中 20 名がルーブリック活用前後で自己評価が変化しており、そのうち 18 名は自己評価が高くなった。項目「8」では、17 名の学生の自己評価が変化しており、そのうち 11 名は、自己評価が低くなった。一方、項目「1」は 27 名中 7 名のみが自己評価が変化しており、残る 20 名は自己評価の変化が見られなかった。

表 2 実習校評定値と教員評定値の差が 2 点以上 (令和 3 年度)

学生 \ 検証対象項目	1	2	3	4	5	6	7	8
a		●						
b			●					
c				○				
d				○				
e				○				
f				○				
g								○
h				○			○	
i				○			○	○
j				○	○		○	○
計	0	1	1	7	1	0	3	3

○実習校評定値>教員評定値 ●実習校評定値<教員評定値

表4 ルーブリックに関する実習校評価者の意見

回答	回答数	意見		
		有効点	要望	課題
必要	12	・どのように評価するのかわからなかったので助かる。		
あった方が 良い	12	<ul style="list-style-type: none"> <li>参考になる。</li> <li>文章でまとめられているので参考になる。</li> <li>視点がわかりやすい。</li> <li>パッと見て比較するのは難しいが評価に役立つ。</li> <li>指導・評価の目安になる。</li> <li>大学によっては評価を一任されることがあるが基準がわからないと思っていたため、あれば嬉しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>早めに欲しい。</li> <li>細かい内容なので事前に欲しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「自ら」の捉え方によっては、ほとんどの評価が3になってしまう。</li> <li>パッと見て比較するのは難しいが評価に役立つ。</li> </ul>
どちらでも よい	2	・あれば活用するが、なければ複数配置校なので相談して評価する。		
ない方が よい	0			
不要	0			

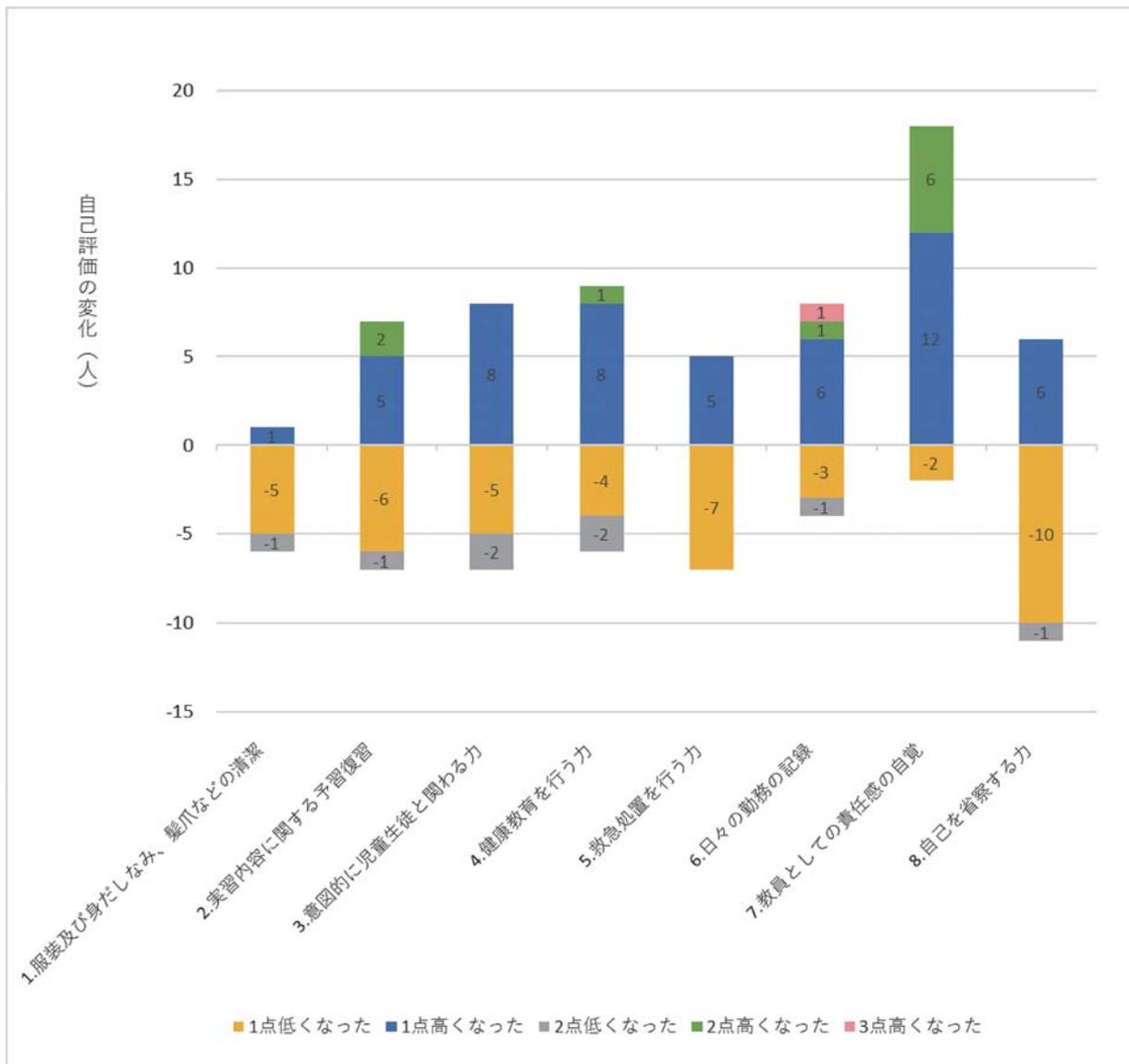


図2 ルーブリック活用群の学生のルーブリック活用前後での自己評価の変化

表 5 自己評価に関わる学生の意見

1. 高めの自己評価になったのは、最初はできなかったけど経験の中でできるようになったこともあったため。
2. ルーブリックに書かれてあることはできるのでそう評価した。しかし、実力は 1 段階低いかもしれない。
3. 自己評価ができていないか心配。謙虚に回答していると、本当にできない気分になった。
4. 知識が少なすぎて自己評価がおおざっぱになった。振り返り力を鍛えたい。
5. 他に養護実習生がいた。その学生との比較で、自分のできていること足りないことがよく分かった。
6. 実習後、時間がたつほど自己評価が厳しくなってきた。実習後のボランティア活動の中で子どもに関わるということがわかってきたため。実習中は慣れるので精一杯だったと気づいた。

また、実習後の個人面談及び教職実践演習の講義の中での養護実習全般に関する振り返りの際に学生から出された意見のうち、自己評価に関わるものは次の 6 つであった (表 5)。

## V 考 察

### 1. ルーブリック活用群とルーブリック未活用群の比較

検証対象 8 項目中の 6 項目について、ルーブリック活用群では実習校評定値と教員評定値の一致度が増加したことから、ルーブリックを活用することで評価者の主観に影響を受けにくい実習評価が行えることが示されたといえる。

ルーブリック未活用群では、「1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔」についての実習校評定値と教員評定値の一致度が最も高かったのであるが、ルーブリック活用群も同項目での一致度が最も高い結果となった。一致度は 68% から 86% に増加しており、これは、評価者個人の基準に基づいて行われていた評価がルーブリックに基づく評価へと修正され、その結果、両評価の一致度が高まったと考える。しかし、ルーブリックには身だしなみの具体や髪・爪の長さ等を示した訳ではなく、また、具体例について実習校教員と学科教員とでモデレーションを実施した訳でもない。それに関わらず一致度が増加した要因としては、次の 2 点が考えられる。まず、学校現場の常識的考えとして、学生に求める身だしなみや清潔保持についての具体例が実習校と教員とでほぼ一致しているであろうという点、そして、それが内的活動ではなく誰の目にも同一にとらえることができるという点である。このように、そのレベルを代表する具体例がすでに共有できているという特徴を持つ項目であったため、ルーブリックを用いることで一致度を高めることができた、つまり、ルーブリックの効果を発揮できたのではないかと考える。

また、一致率が 50% 以上高くなった「5」「6」「7」については、それぞれ次のように考えた。まず、「5. 救急処置を行う力」についてであるが、この項目はルーブリック未活用群の一致度は 38% と最も低く、評価の客観性において課題のある項目であった。しかし、ルーブリ

ック活用群では一致度が 61% となり、一致率は 61% と最も増加する結果となった。救急処置に関しては、実習指導養護教諭から「まだ学生さんなので… (今後できるようになればよい)」「これくらいはできてもらわないと… (今、できていないことは問題)」という二つの相反する言葉が聞かれることの多い分野であるため、評価の視点が将来への期待に置かれる場合と現在の課題の置かれる場合とで、評価が大きく異なる可能性が示されていた<sup>3)</sup>。そこで、ルーブリックにはパフォーマンスの特徴に『どの時点での』『どこに』注目すればよいのか明記した。それにより、評価の視点が統一され、一致度を大きく増加させるに至ったのではないかと考える。

次に、一致率が 53% 増加した「6. 日々の勤務の記録」についてその要因であるが、この項目はルーブリック未活用群の一致度が 40% と先に述べた「5. 救急処置を行う力」の一致度 38% につぐ低さであった。記録は目視確認できるため「1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔」と同様の性質を持つとも言えるが、一目でわかる服装等とは異なり評価の着眼点が複数存在していたり、主観の影響を受けやすかったりするため、代表するパフォーマンスをより明確に表示する必要があると思われた。そこで、実習記録の何を評価の対象とするのかを具体的に示した。これらを踏まえて基準を設定したため、一致度を大きく増加させることができたのではないかと考える。

一致率が大きく増加した 3 つ目の項目として「7. 教員としての責任感の自覚」50% が挙げられる。この項目は、学生の内的活動であることに加え、評価者の教職経験や教育観の影響を受けやすいため、限定的なエピソードに基づいた学生の一側面への評価となる可能性が示唆されていた<sup>3)</sup>。教育者としての自覚や覚悟をどのように評価していくのか、これは本学科の大きな課題でもあった。今回は、職業倫理の理解とそれを果たそうとする姿勢、知識・技術の習得の様子を代表するパフォーマンスとして設定した。評価の一致率はルーブリック未活用群より増加したことから、評価の客観性は向上したと言える。しかし、内的活動を説明するパフォーマンスをどのように選択し、どのような文言でその特徴を表現す

べきかについては、今後も検討を継続していく必要があると考えている。

一方で、ルーブリック未活用群よりもルーブリック活用群の方が評定値の一致率が減少した項目として「4. 健康教育を行う力」「8. 自己を省察する力」の2項目が挙げられる。

まず、「4. 健康教育を行う力」であるが、授業指導案作成と実践、教材や資料の工夫を代表的なパフォーマンスとし、内容改善への取り組み姿勢に応じて評価尺度を設定した。しかし、評定値の一致度は52%から32%へと減少した。健康教育に関しては、「1回目よりも2回目が良い指導になりました」「どうなることかと思いましたが、よくここまでがんばりました」と当日の授業(指導)実践結果と、そこに至るまでの努力の量によって語られることが多い。これらは、授業実践の仕上がり、事前準備等の努力といった、学校現場での従来の授業実践を振り返る際の視点に基づいた意見であるように思われる。しかし、本学科が健康教育において学生に身に付けさせたい力は、勤務校の児童生徒の課題に自ら気づく力、他と協働しながら動く力である。その指標として、実習校教員に指導を受ける過程での実習生としての学びの質を取り上げ、設定したのであるが、これは実習校教員が日頃慣れ親しむ授業実践への評価とは視点が異なるため、このような結果になったのではないかと考える。評価者同士が事前にモデレーションを行い、そのレベルを代表するような具体例について共有しておくことの重要性について、改めて認識させられた項目であった。

同様にルーブリック未活用群よりもルーブリック活用群の方が評定値の一致度が減少した「8. 自己を省察する力」をみると、この項目は一致度が50%から46%へと減少している。今回、自己を省察する力をメタ認知と捉え、他者と自分との差への気づきや他者の良い点の模倣や取入れの状況を代表的なパフォーマンスとした。しかし、これらが有効に機能したとは言い難い。15日間という実習期間の中で、学生のこのような姿が観察される機会がどのくらいの回数見られるかという点、また、表5の指摘にもあるように、『自ら』という言葉の捉え方によって評価が左右されるという点が今後の検討課題であると考えている。

## 2. 実習校評定値と教員評定値の差が2点以上のケース

224ケースのうち、評定の差が2点以上あった16ケースについて、何らかの要因があり生じた結果であると考えた。とりわけ、2点差が認められた項目中の44%に当たる7ケースが「4. 健康教育を行う力」で生じて

いる。しかし、ルーブリック未活用群の同様のケース分析では本項目は2点差が認められた全項目中9%しか占めておらず、今回、ルーブリックを活用したことに何らかの影響を受け、誤差が大きくなった可能性が考えられる。この項目について前述した通り、評価者間の評価視点の差異に要因がある可能性があるため、評価者間でのモデレーションの重要性が示されたといえる。

## 3. ルーブリックに関する実習校評価者の意見

26回答中24回答から、ルーブリックについて「必要」あるいは「あった方がよい」との回答を得た。いただいた意見の中には、ルーブリックの有効点とともにこれまでの評価に関わる困難点について述べられているものが含まれており、評価基準が示されない中で実習生評価は難しいものであることが示されたとも言える。また、「相談して決めるので、ルーブリックの必要性についてはどちらでもよい」との回答も得たが、この場合も複数配置されている同僚養護教諭に相談をする、つまり、モデレーションを行っているのであり、自らが考える「主観的な」評価基準だけで評価することは困難である様子がここからも見てとれる。

要望としては、時間的余裕が必要であるとの意見があった。内容を読み込み理解し、各レベルに対応するパフォーマンスの特徴を具体的にイメージして自分のものにする作業は、紙面を一見して行えるものではなく、やはり時間が必要である。

課題として挙げられているのは、「バツと見て比較するのは難しい」と指摘されているように、難しく感じるということである。評価のためには、各尺度のパフォーマンスの差異が弁別できるようにそのレベルを代表するような具体例を理解しておくことが求められる。この点からもルーブリックを活用するには準備時間が必要であると言える。

最後に、いただいた意見の中の「視点」という言葉に注目すると、様々な内的外的活動が絡み合い成立している教育現場においては、評価尺度だけではなく評価対象となる活動や姿を具体的に提示していくことの重要性が示されたと考えることができる。例えば「救急処置」「健康教育」など、複数の知識と技術を構成要素として持ち、それらを臨機応変に組み合わせて展開される活動について、その評価項目を代表する具体例を提示して共有することは、評価者間の評価の誤差を解消してくための必須事項であると考えられる。

## 4. ルーブリック活用群の学生への指導効果

図2に示されているプラス点数は、ルーブリックを活

用することで自己評価が高く変化したもの、マイナス点数は自己評価が低く変化したものである。

ルーブリック未活用評価とルーブリック活用後評価の差が最も小さかったのは「1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔」であった。これは、実習校評定値と教員評定値の差が最小であったことと同様の理由によるものと思われる。教員としての身だしなみ等について、学生一人一人が教員と同じ評価基準を持って自己評価を行えていることが示されたといえる。

「1. 服装及び身だしなみ、髪・爪などの清潔」「8. 自己を省察する力」については自己評価が低く変化する傾向にあった。自己評価が低くなるということは、学生が自分はできていると思っていたことが実はできていなかったということへの気づきであり、これは今後の学びの伸びしろの発見であると言える。学生自身が自分の成長可能性を知ることは、本学科が重要視する学生の自己教育力向上の基盤であると考えため、この点においてもルーブリックによる学生の自己評価は非常に意義あるものとする。

一方で、「7. 教員としての責任感の自覚」については自己評価が高く変化する傾向にあった。とりわけ「7. 教員としての責任感の自覚」については、パフォーマンスの特徴を具体的にイメージできるものとなっていなかったため、評価の難しさを示す結果となった。内的活動の評価の難しさが再度ここでも確認できたことから、活用の際に学生と行うモデレーションをより丁寧に行う必要があると考える。

表 5 に示した学生の意見には、評価時期についての示唆を得たと考える。秋学期の講義で自己評価の変化を語る学生の様子から、実習後も伸び続ける学生の姿を見ることができた。また、ルーブリック未活用評価とルーブリック活用評価は評価実施時期が異なるため、今回の学生の自己評価の変化がルーブリックの活用によるものか評価時期の差によるものなのかは、今後、見極めていく必要がある。

## VI 今後の展望

今回、ルーブリックの有用性が示された。また、ルーブリックの完成度を高めるための改善点が明らかにできた。それは、代表となるパフォーマンスの特徴が明確に示されていない場合、評価者の主観の影響を受けたパフォーマンスの特徴が抽出される可能性があるという点である。それを防ぐために、学科教員間ではモデレーションを通して具体例を共有しているが、実習校教員と学科教員でそれを行うことは現実的ではなく、複数の実習校養護教諭間においては、不可能である。パフォーマンス

を表現する文言を精選し、具体例の共有を目指さなければならない。

大学が提示した評価基準に基づいた評価を実習校から得るということは、学生の評価を適切に把握できるということに留まらず、大学が意図する教員養成を実習校と共有し、目指す教員像により迫ることができるということでもある。実習後の学内講義及び教員養成に関わる指導全般につなげていくことができるという点においても、大変有用である。しかし、これは実習校側からすると異なるルーブリックを持参した複数の実習生を受け入れることとなり、実習指導教員にとっては非常に負荷がかかることになる。また、教育は、それぞれの教員の教育観の影響の中で展開されている部分もあり、大学が評価基準として目指す学生像を一律に提示することへの現場の戸惑いは想像に難くない。また、私たちは実習校の多忙な状況を理解しており、指導教員に負担をかけない方法を模索する必要がある。このような現状の課題を解決していくためには、大学、実習校・実習指導教員の取り組みや努力だけではなく、教員養成という大きな枠組みでの制度等による実習評価についての検討の必要があるように思われる。

学生へは、実習参加前の授業で、ルーブリックに示された内容について丁寧に共有する時間を持つことで、ルーブリックの到達目標としての機能も最大限活用し、実習における目標提示と共に自己評価力の育成と強化を行っていきたい。また、実習後は、養護実習及び教職実践演習の時間を活用し、実習校、本学科教員、学生の三者の評価を比較検討することで、学生の自己評価力及び自己教育力の向上を図っていききたい。

## VII 結 論

今回、養護実習評価におけるルーブリック未活用群とルーブリック活用群の比較を行った。検証対象 8 項目中 6 項目で評価の一致度が高まり、ルーブリックを活用することでより評価の客観性が高まることが分かった。客観性の高い評価が得られたということは、学生の実態をよりの確に把握できたということでもあり、実習後の学修指導並びに卒業後のキャリア支援に活用できるものと思われる。さらに、ルーブリックの完成度を高めるための改善点も明らかにすることができた。改善における留意点として、評価のための尺度設定ができていても代表となるパフォーマンスが不明確であったり、表現する文言が適切でなかったりする場合は、評価者の主観の影響を受けてそれらが類推される可能性があることを踏まえておかなければならない。

ルーブリックの活用としては、モデレーションの重要

性が示された。各尺度を代表する具体例のイメージを評価者間で共有しておくことの必要性が確認されたため、モデレーションの実施が難しい実習校教員とはなおさら、具体例のイメージの共有ができるよう、代表となるパフォーマンスの特徴を具体的に明示する必要がある。

#### 引用文献

- 1) 関西女子短期大学「養護保健学科教育目的、教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー」、学生便覧、2021年
- 2) 斎藤千景、竹鼻ゆかり、三森寧子、鎌塚優子、鹿野裕美「養護実習を行う養護教諭のための『養護実習サポートガイド』の作成と評価」、埼玉大学紀要、2020年
- 3) 久保加代子、大西宏昭、毛利春美、竹原章雄、森島研次「養護実習における評価のあり方－実習校評定値と教員評定値の比較から－」、関西女子短期大学紀要31号、2021年12月
- 4) 岡田広示「グループ・モデレーションを用いた学級経営評価研修の効果の検証」、日本学級経営学会誌、2019年第1巻P10